

Suggested Interpretation

ことわざとは、短く簡潔な方法で忠告を述べたり、教訓を提示したりする伝統的な言い回しのことである。

ことわざは簡単に主な 3 つの部類に分けることができる。まず最初のタイプとして、一般的真実を表す抽象的な表現の形態をとるものがあるが、例えば、「離れるほど思いは募る」や「時は金なり」がそうである。2 つ目のタイプのことわざには、より多彩な例の多くが含まれるが、これらは日常の経験からの特定の観察事項を用いて一般的な事柄を主張するものである。例えば、「馬を水辺に連れて行くことはできるが、水を飲ませることはできない(周囲で何を言おうとも肝心なのは本人の気持ちだ)」や「卵を全部 1 つのかごに入れるな(危険は分散させよ)」がこれに当たる。3 つ目のタイプのことわざは、伝統的な知恵や民間伝承の特定の分野からの言い習わしを含むものである。このカテゴリーには、例えば、「昼食後には少し休憩、夕食後には 1 マイル散歩」や「風邪にはエサを、熱には飢えを(風邪をひいたらしっかり食べ、熱が出たら食べないように)」という健康に関することわざがみられる。これらは古典の格言を口語訳したものであることが多い。加えて、農業や季節や天候に関連した伝統的な田舎のことわざがある。例えば、「4 月のにわか雨が 5 月の花をもたらず」や「風が東から吹くと人にも家畜にも毒」などである。

ことわざは廃れつつある、あるいは使い古されているということがときどき言われる。そのような見方は、英文学におけることわざの役割は変化したとはいえ、その人気は不変であるという事実を見過ごしている。中世、そして 17 世紀になっても、ことわざはしばしば普遍的な真実の地位を有し、主張を確証したり反論したりするのに用いられた。討論の際に学者の

助けとなるよう、長すぎるほどのことわざリストがまとめられた。そしてラテン語、ギリシア語、ヨーロッパ大陸の言語の多くのことわざが、この目的のために英語に取り入れられた。しかし 18 世紀までには、教養のある作家らの作品の中でことわざの人気は低下した。彼らは、退屈でありきたりの知恵を表すものとして、ことわざを嘲笑の的にし始めたからである。

どのようにしてことわざが不人気となったのかを知るのは容易である。見たところ、相反することわざを対にすることができる。「料理人が多すぎるとスープの味がだめになる」と「人手が多ければ仕事が楽だ」、「離れるほど思いは募る」とその逆の「去る者は日々に疎し」を対に並べることができる。それでことわざ

は学識者の世界では簡単に皮肉の対象になってしまったのだろうし、現在でもなお、洗練された名文家の眉をひそめさせることがときどきある。それでもなお、ことわざは、人生の素朴な論評として、また祖先の知恵が現在でも我々にとって有益であることを気づかせてくれるものとして、人気を保持している。このような変化は、辞書の見出し語についている用例文に反映されている。最近の用例文は無名の作家の作品や新聞、雑誌から採られることが多いが、昔の用例文は有名な作家の作品から採ったものがもっと多い。古いことわざが使われなくなるにつれて新しいことわざが絶えず生み出されていることは、ことわざのもつ活力を反映したものである。驚いたことに、「気分転換は休息に匹敵する」も「分かちあえば(人に話せば)悩みも半減する」も 20 世紀以前には記録がない。よく言われる言い回しである「見守っていても鍋は煮立たない(気をもんでも物事が進展するわけではない)」は 1848 年になってやっと登場している。最近、コンピュータの世界は、古典になる可能性のある「ゴミを入れればゴミが出てくる(誤ったデータを入力すると結果も誤ったものになる)」をもたらしてくれたし、また経済も「無料の昼食など

というものはない(ただほど高いものはない)」ということわざをもたらしてくれた。昔の収集家が飽きもせず述べていたように、ことわざは、普通の会話という肉に風味をそえる調味料を提供しつづけるのである。